

聖書にあらわれた系譜性

小 田 丙 午 郎*

Genealogy in Biblical Point of View

Heigoro ODA

(1977年9月30日受理)

は じ め

我は天地の造り主，全能の父なる神を信ず。我はその独り子，我らの主，イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり，処女マリヤより生れ，ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け，十字架につけられ，死にて葬られ陰府にくんだり，三日目に死人のうちよりよみがえり，天にのぼり，全能の父なる神の石に座したまえり，かしこより来りて生ける者と死ぬる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず，聖なる公同の教会，聖徒の交わり，罪の赦し，身体のよみがえり，永遠の生命を信ず。

上掲の文は *Symbolum Apostolorum, Apostles' Creed*¹⁾ すなわち使徒信条の訳文であり，2世紀後半にローマ・カトリック教会によって集約されまた要約されたキリスト教徒の信仰告白であり，さらに引き続きこれは，カトリック教会はもちろん16世紀以後のプロテスタント教会にも採用されて今日におよんでいる。

宗教には *Numinose*²⁾ がつきものであるとはいえ，上の使徒信条には一読して一般人の理性を納得させないものがある。イエスが処女から生れたといういわゆる *Virgin birth* もその一つ。わたくしは本論文において生物学的見地に立ち，その合理か非合理かに言及しようとはしない。一方わたくしは処女降誕に神学的立場からその理論づけを試みようとはしない。わたくしは本文において，先ず処女降誕が記されているマタイによる福音書とルカによる福音書においてこれまで人が軽く読みすごして来た箇所を指摘し，そこから聖書にあらわれた二つの対立する系譜性と非系譜性を紹介し，最後に非系譜性の立つ究極の論拠を追求して行きたい。

イエスの系譜

イエスの伝記が記されているのは新約聖書のうちマタイ，マルコ，ルカとヨハネの名を冠する *κατα Μαθθαλον, κατα Μαρκον, κατα λουκαν, κατα Ιωαννην* すなわちマタイによる福音書，マルコによる福音書，ルカによる福音書とヨハネによる福音書のいわゆる四福音書である。(以下わたくしはこれらの名称を省略しマタイ，マルコ，ルカとヨハネとする)。そしてこれら四つの福音書のうち，マタイ，マルコとルカとは記事内容が共通の資料に基づくものがあるとされるところから *Synoptic Gospels*³⁾ 共観福音書と呼ばれ，ヨハネはその観点と文体が異っているために *The fourth gospel* 第四福音書と名づけられている。

* 史学研究室

以上の四つの書で処女降誕とそれまでの系図を記しているのはマタイとルカ。ヨハネはこの記事に触れず、むしろこの史実を前提としたかのように、これに次のように神学的解釈を加えている。

καὶ ὁ λόγος σὰρξ ἐγένετο.

そして言は肉体となった。

上のように処女降誕に関する記事にマタイとルカに取められているが本文では主としてマタイから引用することにする。人も知るようにマタイは新約聖書27巻の壁頭におかれ、その開巻には下のようにイエスの系図が書かれている。

アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。

アブラハムはイサクの父であり、イサクはヤコブの父、ヤコブはユダとその兄弟たちとの父、ユダはタマルによるパレスとザラとの父、パレスはエスロンの父、エスロンはアラムの父、アラムはアミナダブの父、アミナダブはナアソンの父、ナアソンはサルモンの父、サルモンはラハグによるボアズの父、ボアズはルツによるオベデの父、オベデはエッサイの父、エッサイはダビデ王の父であった。ダビデは、ウリヤによるソロモンの父であり、ソロモンはレハベアムの父、レハベアムはアビヤの父、アビヤはアサの父、アサはヨサパテの父、ヨサパテはヨラムの父、ヨラムはウジヤの父、ウジヤはヨタムの父、ヨタムはアハズの父、アハズはヒゼキヤの父、ヒゼキヤはマナセの父、マナセはアモンの父、アモンはヨシヤの父、ヨシヤはバビロンへ移されたころ、エコニヤとその兄弟たちとの父となった。バビロンへ移されたのち、エコニヤはサラテルの父となった。サラテルはゾロバベルの父、ゾロバベルはアビウデの父、アビウデはエリヤキムの父、エリヤキムはアゾルの父、アゾルはサドク、サドクはアキムの父、アキムはエリウデの父、エリウデはエレアザルの父、エレアザルはマタン、マタンはヤコブの父、ヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であった。このマリヤからキリストといわれるイエスがお生れになった。 1. 1-16

上の訳文は原文の内容をあやまりなく伝えている。がこれをさらに原意に近けるために次の二つを付言したい。出産の主体を母性に帰する現代人とは異なり、古代人はこれを父性にした。原文にはそれが反映され下のように記されている。

'Αβραάμ 'Εγέννησεν τὸν Ἰσαακ, Ἰσαακ δὲ 'Εγέννησεν τὸν Ἰακωβ ……

において用いられている *'Εγέννησεν* は *γεννάω* の aorist tense. 英語の *beget*,⁴⁾ ドイツ語の *erzeugen* がこれの訳語として応わしい。この点では文語訳のようにアブラハムイサクを生み、イサクヤコブを生み…… とする方が望ましい。なお日本語では敬語のらると受身のらるとは同形であるところから、文意が不明になることもある。前に掲げた文の終わりの「お生れになった」原語 *'Εγεννηθη* はすでにあげた *γεννάω* の Aorist で受身。

イエスの系図の問題点

マタイは直接に聞知した間接に口伝もしくは資料によるイエス・キリストの出来事を整理し、これらに旧約聖書の予言⁵⁾ が成就した裏づけをしている。それは植物を採集した学者が図鑑に照合してその学名をつけるのにも似ている。マタイはメシア待望の路線の方向をアブラハムとダビデの末裔に定めた。彼の記すところによればイエスはヨセフと婚約中のマリヤから生れた。そしてヨセフはダビデの血統を引くものとされている。しかしマリヤについてはその父の名も母も示されていない。もしマタイが旧約聖書の予言がそのまま実現すると信じたとすれば、マリヤをこそダビデの系譜のなかに入れなかったのはな

ぜであったろうか。

わたくしはここで再び植物を採集する学者の例をとろう。もし彼が採集した植物のなかに図鑑から漏れているのがある場合、彼はどのような態度をとるであろうか。旧約聖書の予言にイエス・キリストの生涯を照合させようとしたタイもこのような苦境に直面しなかったであろうか。

一方ルカの記すマリヤもまたヘブル人への手紙の筆者の表現を用いれば ἀγενεαλόγητος (系図のない) である。繰りて記せば処女降誕は使徒信条の箇条となり、カトリック教会にはこの一条が占める比重は非常に重い。かれらはマリヤの処女性について強調しこれをさらに神性⁷⁾に高めようとする。だがかれらはマリヤの系譜外存在に関してどれだけの関心を見せたであろうか。他方マリヤの夫ヨセフに絡んで、ルカは次の記事を取めている。

そのころ、全世界の人口調査をせよとの勅令が皇帝⁸⁾ アウグストスから出た。これは、クレオオがシリアの総督であった時に行なわれた最初の人口調査であった。人々はみな登録をするためにそれぞれの町へ帰って行った。ヨセフもダビデの家系であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出てユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。それはすでに身重にはっていたいいなづけの妻マリヤと共に登録するためであった。

以上のようなローマ政府のユダヤの統治の脚光を浴せながらヨセフの地縁につながる系譜を浮彫にしている。彼はしかしマリヤについてはその出生地ナザレをあげるにとどめている。

非系譜性について

旧約聖書はヤハウエの選民としてのユダヤ人の歴史であると言っても差支がない。人も知るようにユダヤ人を構成するものは複雑な部族である。そしてこれらの部族のすべてが神の選民とされたのではない。神が選びその子孫は末長い祝福を約束したのは集団としての部族ではなく、その部族⁹⁾の代表者であった。例えばマタイがイエスの系図のはじめにかかげたアブラハムのような選民とされた部族からさらに新しい部族が派生する。ここにおいて古い部族と新しい部族との間で系譜について正潤が論議され論争されて来る。創世記に記されているアブラハムの正妻サラ¹⁰⁾と側女ハガイとの物語はこの消息を如実に語っているのではなからうか。

このような視点に立ってユダヤ人の歴史を一見する時系譜がかれらに持つ意義はあたかも古代ギリシャ人の所属する πόλις の住民証明のようなものではなかつたろうか。ユダヤの歴史はまたヤハウエの自己啓示のそれでもある。神が自己を啓示した様式は多種多様であったが主として特定の歴史的人物に対してであった。ユダヤ人にはそれゆえにその祝福を約束された人物の血統にあやかることは同時にその人に約束された祝福にあやかることであった。ではユダヤの歴史上で神の祝福を受けたと公認されたのは誰であったか。それはさきあげたアブラハムは言わずもがなのこと、イスラエル統一国家の王¹¹⁾ダビデ・マタイがイエス・キリストの系譜を族長アブラハムと王者ダビデに限定したのはメシア系譜の本筋を旧約聖書¹²⁾によって捉えたと言えるのではなからうか。紀元前6世紀のバビロン捕囚以後メシア路線に沿いどのような系譜論争がなされたか。これはわたくしには今後の課題として残されたままになっている。

バビロン捕囚以後、ユダヤ民族の課題となったのは神殿の再建であった。この神殿がエルサレムに再建されるにつれ Sacrifice system が確立された。ここにいたり、祭司の地位

が高まり、アロンの血統をひくものの家系が誇られたことは容易に考えられる。アレキザダー大王の東方征服からヘロデ王朝まではユダヤは殆どシリヤ、ローマの外国に支配された。この間の祭司⁴⁴たちは外国支配に対しては文字通り風にそよぐ草であった。一般民衆にはもはや家系が魅力の対象とはならず、むしろかれらにはこのような外国支配に抗し民族の独立を守りその伝統を保ち、信仰を続ける新しい人間像であった。こうした一般民衆の要望に応じて立ち立ったのはいわゆる Pharisee 派であった。かれらは家系を看板にする Blutadel (血統貴族) ではなく、実力を訴える Dienstadel (恩功貴族) となった。イエスが教敵としそしてイエスに向って挑戦のは外ならぬこのパリカイ派であったことは人に知られているところである。

上に述べたところから、イエスの時代には殊にかれの弟子たちによって系譜が演じた役割に疑義が持たれ検討されていたのであろう。アブラハムの子であるダビデの子であるイエス・キリストの系図を筆頭にして、このテーマを展開しているマタイにより福音書の記者もこれについて旧約聖書を見る立場を変えた。すなわちこの福音書の記者の救済史観は次のように簡単に要約できるであろう。神の救いは系譜に従いしかも系譜にとらわれることがない。彼がダビデの系譜をヨセフに付与しながらマリヤのそれは不明にしたのは如上の救済史観にもとづくのであろう。これはルカの立場でもあった。かれらにはヨセフは系譜路線の最後の人、マリヤは非系譜のスタートとなった最初の人である。そしてここにもかれらは旧約と新約、ユダヤ教との分岐点に道標を設けたのではなからうか。

非系譜の精神的考察

(1)

マタイ、マルコ、ルカとヨハネの四つの福音書でイエスの宣教に先立って登場するのはバプテスマのヨハネである。彼の人物と活動と評価については四人の記者は筆をつくしている。彼がヨルダン川で *βάπτισμα μετανοίας εἰς ἄφεσιν ἁμαρτιῶν* 罪をゆるしを得させるバプテスマを施した時、パリサイ人サドカイ人を含めた全ユダヤの人が集った。この時ヨハネが人々に告げた言葉としてマタイに記されているのは次のようである。

まむしの子らよ、迫ってきている神の怒りから、おまえたちはのがれるとだれが教えたのか。だから、悔改めに応わしい実を結べ。自分たちの父にはアブラハムがあるなどと心の中で思ってもみるな。おまえたちに言うておく。神はこれらの石ころからでもアブラハムの子を起すことができるのだ。3.7-9

ヨハネは殉教の死をとげた。イエスの宣教はその直後に始められた。そしてイエスの宣教が要約されているのは下の一句とされている。

πεπλήρωται ὁ καιρὸς καὶ ἤγγικεν ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ μετανοεῖτε καὶ πιστεύετε ἐν τῷ εὐαγγελίῳ.

すでに約束の時が満され神の国は近いて来た。心を変えこの喜ばしい使信に信じ入れ。試訳

ヨハネとイエスの宣言の間には語気と語義と内容において異なるものがありその次元の高低には一線が画されなければならない。イエスの宣言はしかしヨハネのそれを補充しいな充足したものである。かれらは宣教の方法と順位で相通ずるものがある。かれらはいずれも世の終わりとそのさばきを宣告し、悔い収めを促した。悔い改めの原語は前記した *μετάνοια* にはドイツ語の *Sinnesveränderung* の訳話が当てられている。

ではかれらはどのような順序で同胞に悔改めを迫ったのであろうか。先ずヨハネの場合

をあげると禅家の脚下願照のモットーを思わせるようなそれぞれの人にそれぞれに課せられた義務を果すように、例えば兵士には“人をおどかしたり、だまし取ったりしてはいけない”。“自分の給与で満足していなさい”。とか取税人には“きまっているもの以上に取り立ててはいけない”。と戒めている。が彼の究極の意図としたのは“自分たちの父にアブラハムがあるなどと心の中で思っても見るな”。と言う言葉を変れば“君たちがこれまででいて来た選民意識をすっかり精算せよ”。と訴えることにあったのではなからうか。一方、イエスの宣教の主題は神の国であると言われている。マタイは殊にイエスの天国の教義を集成しようとつとめている。

イエスの教訓を代表するものは世に言う山上の垂訓である。これの教訓の対象となったのは一般民衆でなく、かつての教訓は天国の市民の資格づけを前提としたとは多くの注解者の見解である。いま山上の垂訓の一節を下に紹介する。

「目には目を、歯には歯を」と言われていたことはあなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに話す。悪人に手向うな。もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも与えなさい。もし、だれかが、あなたをしいて一マイルを行かせようとするなら、その人と共に二マイル行きなさい。求める者には与え、借りようとする者を断るな。マタイ、5.38-42

この教訓は、しかし当代のユダヤ人の実存と実態とを反映していたであろうか。これとはうらはらにかねらげに暴に報いるに暴を以てしたことは新約聖書の随所からうかがわれるところである。

繰返して記せば、イエスの宣教のテーマは“神の国”である。神の国とは天上的彼岸的霊的な共同体である。このような神の下に (under God) ある天的彼岸的内的な共同体に対し神に逆い (against God) そして悪魔の支配下に (under Satan) ある地的此岸的内的な共同体を新約聖書は *κόσμος* と言い日本語訳聖書にはこの世と訳されている。

次は山上の垂訓の中の祈に関するイエスの教え。

ἐλθάτω ἡ βασιλεία σου

御国が来ますように。6.10

以上によれば、神の国は未到の状態であり、そして不可見である。これに対しこの世が可見であり、現存であることは新約聖書の多くのところで記されている。イエスの時代にはユダヤがローマに統治されていた。イエスには一般のユダヤ人と同じようにローマ帝国は *ἔθνος* 訳せば異邦であった。またこれが *κόσμος*¹⁵⁾ に含まれ、しかもそれを代表するものとされたことは明らかである。

ローマ帝国は確かに *κόσμος* に含まれる。がこの世に属するものはローマでありユダヤはこれから除外されたのであったろうか。四福音書がこれについて証するものはその反証でありまたそれへの反論である。ここで第四福音書のイエスの言葉を利用し上の例証の一つとしよう。

‘Υμεῖς ἐκ τοῦ πατρὸς τοῦ διαβόλου ἐστὲ καὶ τὰς ἐπιθυμίας τοῦ πατρὸς ὑμῶν θελετε ποιεῖν

あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行なおうと思っている。ヨハネ8.44

(2)

旧約時代すなわちイエスの出現以前のユダヤの歴史においては選民としてのユダヤ人と異教徒としての異民族との間には一線が設けられていた。新約時代別言すればイエス出現以後のキリスト教会の歴史に入ると、ユダヤ人は神の国の市民からあべこべに一線を画せられ、その結果かれらの系譜は言わば仏家の法名の過去帳のような存在となった。他方ユダヤ教徒もキリスト教徒も自己の存在由の基礎づけの拠点となったのは Canon (正経) としての旧約聖書であった。そしてユダヤ人からこの旧約聖書の解釈に関する通あるいは権威と見なされていたのはこれまでに上げたパリサイ派がありそれに加え律法学者があげられる。イエス¹⁵⁾とこれらの教役者たちとの論争と対立は旧約聖書にあらわれた諸問題をめぐってであったことは福音書を一読した者には言うまでもない。

ここでわたくしたちは筆をイエスからパウロに移そう。彼はパリサイ人であった。彼はキリスト教徒の迫害の張本人であり、その仔細はその弟子ルカの筆になる *Πράξεις Ἀποστόλων* (使徒行伝) に記されている。彼がなぜキリスト教徒を迫害したか、彼が自らその迫害者であったことを新約聖書に収められている書簡の中で告白している。今その一つを引用すれば、

Ἐγὼ γάρ εἰμι ὁ ἐλάχιστος τῶν ἀποστόλων, ὅς ὑκ εἰμὶ ἰκανὸς καλεῖσθαι ἀπόστολος, διότι ἔδωξα τὴν ἐκκλησίαν τοῦ θεοῦ.

私という私は使徒たちのうちで一番の未輩であり使徒と呼ばれる資格がない。そのわけは私は神の教会を迫害したのだから。試訳 ユリント人への第一の手紙15.8
では彼はなぜキリスト教会を迫害したか、彼のこれについての弁明は

ἀγνοῶν ἐποίησα ἐν ἀπιστία

不信仰で無知であったためになした。試訳 テモテ人への第一の手紙1.12
と抽象的な表現し具体的な告白はここにはされていない。彼がキリスト教徒の迫害者からその使徒に回心した契機はダマスコ途上でのキリストとの出会であった。この時キリストからパウロへの名乗りは次のとおりであった。

Ἐγὼ εἰμι Ἰησοῦς ὃς σε διώκεις

わたしは、あなたが迫害しているイエスである。使徒行伝9.5

ルカはルカによる福音書の著者でもありその美しい筆緻も鋭い史眼とは教会史家たちに注目されている。彼は短い上のイエスの自己宣言の中にパウロの迫害の理由を示唆しているのではなからうか。つまりパウロが迫害の対象としたのは栄化されたキリストではなく、人の子としてのナザレのイエスであったのではなかったか。パウロも当時の一般のユダヤ人のように系譜への関心とそれからの圧力を免れることができなかった。この間の消息が語られているのは次のコリントへの第二の手紙の章句である。

Ὡστε ἡμεῖς ἀπὸ νῦν οὐδένα οἰδομεν κατὰ σάρκα. Εἰ καὶ ἐγνώσκαμεν κατὰ σάρκα χριστόν, ἀλλὰ νῦν οὐκέτι γινώσκομεν.

それだから、わたしたちは今後、だれをも肉によって知ることはすまい。かつてはキリストを肉によって知っていたとしても、今はもうそのような知りをすまい。コリント人への第二の手紙5.16

前掲の文に二回使用されている *σάρκα* は新約聖書のギリシア語として独自の意義を持ってそしてその内包の一つとして系譜が含まれていることは付言されなければならない。イエスがパリサイ派と系譜問題を中心として論争し決裂したように、パウロもまたかれらと袂別するに至った過程も次の章句によってうかがわれる。

Εἴ τις δοκεῖ ἄλλος πεποιθέναι ἐν σαρκί, ἐγὼ μάλλον·

もしたれがほかの人が肉に誇りを持つと思うなら、私はなおさらのこと。試訳 ビリビ人への手紙3.4

彼はこう述べ、ひき続き日本の戦記物語に登場する武士の名乗合いのごとく、割礼を受けたもの、イスラエルの民族に属するもの、ベニヤミン族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法の上ではパリサイ人と豪語しながら、それを結ぶのは下の一句である。

Ἀλλὰ ἅτῳ ἦν μα κερδη.

それらはしかし私には空しいものであった。

他面彼は肉を神の国と関連づけてこう言う

σὰρξ καὶ αἷμα βασιλείαν θεοῦ κληρονομήσαι οὐ δύναται,

肉と血は神の国を継ぐことはできない。コリントへの第一の手紙15.50

なお血肉と肉は異語であってその意味内容は同義である。

(3)

再びマタイの系図に返ろう。所掲の系図に出生由来を明らかにすべく、タマル¹⁷⁾とルツにウリア¹⁸⁾の妻の三人の女性の名が織り込まれている。タマルは売春婦、ルツは異邦人、ウリアの妻の名はバテセバ。またウリアとはダビデの忠臣。マタイがこの系図の中に三人の女性の名を挿入することによって意味したのは何であったろうか。想うにこれは万世一系の聖天子の系譜とは相違し、末裔にメシアを予言されたダビデ王朝の血の汚れ、血の呪い、血の混りを示唆したものであろう。イスラエル統一王国の名王とされるダビデ王の生涯の汚点として聖書記者が特筆するのは上記のウルヤの妻との不義密通である。ダビデはしかし予言者ナタンに弾罪されて改悛した。その心境をさながらに吐露したのは詩篇51篇であると言われる。その前半を下に記せば

神よ、あなたのいつくしみによって、わたしをあわれみ、あなたの豊かなあわれみによってわたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。わたしは自分のとがを知っています。わたしの罪はいつもわたしの前にあります。わたしはあなたにむかい、ただあなたに罪を犯し、あなたの前に悪い事を行いました。それゆえあなたが宣告をお与えになるときは正しく、あなたがさばかれるときは誤りがありません。見よ、わたしは不義のなかに生まれました。わたしの母は罪のうちわたしをみごもりました。

前掲の訳文を逐一的な釈義は割愛し、終わりの二節に触れれば、これらはヘブライ文学の対句法(Parallelism)により同一の内容が表現されている。一方生むには原語ヘブライ語では震えるのみごもりには肉欲に燃えるの意味があると言う。徒ってこのことからこの作者が告白するのは自らの出生の由来、すなわち嫡子庶子私生子の戸籍ではなく、血統の中に、血統を通しての罪性ではなからうか。マタイが系図に加えているダビデの子ソロモンは賢王としてユダヤがヘレニズム世界に被圧された時代には知恵の化身とされた。

「わたしもまたすべての人と同じ死すべき着土から生まれ最初に造られたアダムの子孫、母の胎で肉として形づくられた。十月にして血でかためられ男の種と婚姻の楽しみから生まれた。」とはソロモンの名を冠するソロモンの知恵の章句である。以上は引用された詩篇の作者とソロモンの知恵の編者の中にユダヤ人の系譜の誇りから非系譜の謙虚への精神過称が見出されるのではなからうか。

む す び

これもすでに述べた。ヨハネには処女降誕の記事が欠けている。マタイとルカが描くのは処女マリヤから生れるナザレのイエスであるのに対し、ヨハネが示すのは肉となったロゴス、受肉のロゴスとしてのキリストによる霊なる人の誕生の予告である。

“Ὅσσοι δε ἔλαβον αὐτόν, ἔδωκεν αὐτοῖς ἐξουσίαν τέκνα θεοῦ γενέσθαι, τοῖς πιστεύουσιν εἰς τὸ ὄνομα αὐτοῦ, οἳ οὐκ ἐξ αἱμάτων οὐδὲ ἐκ θελήματος σαρκὸς οὐδὲ ἐκ δελημάτων ἀνδρός ἀλλ’ ἐκ θεοῦ ἐγεννήθησαν.

しかし彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また人の欲にもよらず、ただ神より生れたのである。ヨハネ、1.12-13

以上の日本語訳に二つを付言しなければならない。人の欲とされた原語 ἀνδρός は ἀνήρ の genitive. これには男また夫の意味がある。そして生れた原語 ἐγεννήθησαν は γεννάω の aorist の passive. もし原語に含まれる上の語義と語のニュアンスが読み入れられるなら、これらは正しく前節で紹介されたソロモンの知恵の誕生観と対照的であると言わねばならない。肉にある人の誕生の初声が聞かれる。が霊にある人のそれは聞かれない、また見られない。ヨハネはその機微を下の比喩で言い表わそうとしている。

Τὸ πνεῦμα ὅπου θέλει πεί, καὶ τὴν φωνὴν αὐτοῦ ἀκούεις, ἀλλ’ οὐκ οἶδας πόθεν ἔρχεται καὶ ποῦ ὑπαγεῖ οὕτως ἐστὶν πᾶς ὁ γεγεννημένος ἐκ τοῦ πνεύματος.

風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこから来て、どこへ行くかは知らない。霊から生れるものも、みなそれと関じてである。3.8

序に霊と肉との対立概念はパウロの手紙のなかにしばしば見出される。しかしこの二語相反する対立が拡大され深化されたのはヨハネにおいてである。ヨハネには ἀνθρωπος πνευματικός 霊的人間が ἀνθρωπος σαρκικός 肉の人間に対峙して誕生したことの意義は人類史上における Ur-Mensch に対する Homo Sapiense の出現以上のものであった。返らぬ過去へ旧きものを押しやるのは歴史のながれ。旧約における系譜は無意義のままに埋没したであろうか。選民の祖アブラハムは死んだ。イスラエル王国の建設者ダビデもまた。しかし、マタイによればかれらはなるほど塵に帰した。にもかかわらずかれらを選びかれらの子孫に永遠の祝福を約束した神は永遠である。いな、永遠の自己同一者である。

パウロは自らに問う。アブラハムの子孫とは誰か。これがアブラハムの血統 (Carnal lineage) にあやかるものではなく、その霊統 (Spiritual lineage) を継ぐものの謂であると悟った時、旧約の遺産が新約に受けつがれ、初代キリスト教会とイスラエルの選民の歴史とは非連続の連続のうちに連繫されるようになった。Weltgeschichte ist Weltgericht. 世界歴史とは世界審判なり。

私はこれをこれまで本紀要に寄稿した論文において一度ならず引用した。これに照せば地上にあらわれた民族のうちかつて歴史悪を免れた民族が存在したであろうか。“人は死すべきもの”に照応して“民族とは滅ぶべきもの”を根本命題とする哲学があらわれないだろうか。これに反し民族の単元が水滴が大海に投入するように人類に解消される日が期待されるであろうか。20世紀の終末が近いというわたくしたちに解決を迫られる課題は余りに深刻である。

注

1. The interpreters one volume commentary 1971, p. 1050.

2. Rudolf Otto: *Das Heilige* 1971, p. 5.
3. ブルトマン, クンズイン著山形孝夫訳, 聖書の伝承と様 1966, p. 7 ff.
4. これは Authorised Version (A. V.) の用語.
5. Mt. 1.21, 2.6, 2.14, 2.19 etc.
6. *προς Εβραίους* 7.3 devoid of any genealogy ICC. Hebrews, p. 92.
7. 新約聖書, ドン・ボスコ社出版, 1967, p. 10.
8. International Critical Commentary St. Luke, p. 83. これを実証するローマ側の資料がない.
9. Genesis XVII. 11-12 XLIX.
10. 同上, XVI.
11. Samuel 2, VII. 12.
12. P. A. Micklem: *The gospel according to Mathew*, p. 1.
13. Ezra, Nehemia, Leviticus 参照.
14. D. S. Russel: *The Jews from Alexander to Herod*, p. 26 ff.
15. Bauer: *Greek-English Lexicon of the New Testamnet and other early Christian literature* 1952, p. 466 ff.
16. Mt. XXII.
17. Genesis XXXVIII.
18. Ruth XI.
19. Samuel 2, XI.

Summary

In this paper the writer has tried to state the process how the Jewish interest in genealogy has been lost in the age of new Testament. And then he goes further to find out the main current of thought that leads to the reason thereof. In conclusion he suggests that the ultimate reason is the awaking of the original sin both in the Jew and in Christian.